
命（ミコト） 錨酒

かよきき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命ミコト 錨酒

【コード】

N0382J

【作者名】

かよきき

【あらすじ】

山の中で酒を売っているアオと名乗る男は意外な過去の持ち主だった。

謎の青年ミコトの旅 第三弾。

山の中の酒売り

「くださいなっ」

そこは御門^{みかど}の鎮座する平城京よりもつと北側にある村から、さらにズンズンと北の山を登り海の国との境の道に小さな集落が塊り、旅人を相手に商売をしているところだった。

都から次の村まで歩くのちょうど夜になるあたりであり、客も少ない。

その集落の外れのあたりで一人、手製の酒を売っている酒売りの男がいた。

「なんだ、またあんたか。 毎年買いに来るな。」

「ええ。 だってオジさんの酒とっても美味しいんですよ。」

酒を買いに来た客はニコニコしながら、酒売りの男の前に並べられた酒の瓶^{かめ}をさすった。

酒売りは口の右側だけをあげ薄ら笑いを浮かべる。

「・・・そりゃ、ありがたいね。・・・でもあんた酒なら他にも米から作ったのとか、野いちごから作ったのとか、色々あるぞ。なんであんたいつも、この錨酒^{いかりざけ}なんだ？」

酒売りは瓶に張ってある布をぐるぐる巻きにしばった紐を解き始める。

「他の酒は他の地方でも売ってるんだけど、この錨酒はおじさんの

とこしか売ってないし、これ飯とあうってわけじゃないんだけど寝る前に飲むと実に目覚めがいいというか・・・」

「ふーん。ま、いいわさ。ところで金は持ってきたのか？またあの変な薬で交換しろって言われてもさー。あの去年持ってきた”髭が生える薬”っての髭も生えてきたけど、いろんな所の毛まで伸びちゃって大変だったんだぞ。」

瓶の横の粗雑な箱の中には瓢箪ひょうたんが沢山はいつている。酒売りはその一つを手を取った。

「あーそれは本作用ですよ。私の売ってるのは薬じゃなくて”毒”ですから。ちよつと体に無理してでも副作用で病状回復とか願いをかなえるのが目的です。多少の我慢はしてもらわないと・・・」

「ふはは 変な男だなあんた。 で、今年は何の毒をもってきたんだ？」

酒売りは瓶から尺で酒をすくうと瓢箪ひょうたんの中に器用に移す。
一滴もこぼれない。

それを嬉しそうに眺めながら客は答えた。

「一刻だけ目が良くなる毒です。 遠くのものを見なければどんなに離れていても見えるしどんなに小さい物も形を把握できます。ただし、十日は目が敏感になり、瞼まぶたを閉じてても自分の体の中を見続けず、そのまま眠れない状態に陥ります。 そのため寝不足、イラつき症状が出ます。」

客は重そうな袋の中から、黄色い竹筒を出しフタを取るとその中から紫色の丸薬が二粒ころころと手のひらに出てきた。

客の手はなぜか蛇の皮のようなうすい皮で巻かれている。いや、よく見ると首から下、全身を何かで巻いている。

だが何年も酒を買いに通つてくるので、酒売りはその不思議な客の様相に慣れて聞くこともしない。

にやけながら、その丸薬と酒の入った瓢箪ひょうたんを交換した。

「いらねーな ふははは」

酒売りは豪快に笑いながら、瓢箪とその竹筒を交換し一応胸にしまった。

客は酒を大事そうに脇にくくりつけ、ニコリとすると立ち上がりキョロキョロとあたりを見渡す。

もう、空は夕暮れに近い。

「あんた、これから何処にいくんだい？ それともこここの宿のどこかに泊まりにきたのか？」

客は頭をポリポリとかいた。

「目的もなくブラブラしてるのが性分です。ただこのあたりは賊も出るって聞きますからね。今日はどこかに泊まるうと思つてますが、知つての通り金はいくらもありません。近々にお堂でもあればいいのですが、酒売りさん。どこか程よい所知つてます？」

酒売りはもう店じまいとばかりに、荷車に酒瓶を載せはじめた。いつも座っているから判らなかつたが意外に大きい男だ。

「ねーなあ。 まあ あんた悪い奴じゃなさそうだし、一晩ぐらいならウチに泊めてやってもいいぞ。 つつても狭い掘っ立て小屋で母ちゃんと息子もいて土間くらいしか貸してやれんが」

酒売りはまた口をゆがめるように笑った。

客は嬉しそうに深々とお辞儀をした。

「ありがとうございます！！ お言葉に甘えちゃいます えへへ じゃあお礼に。」

客はまたカバンの中から皮袋に入った米を出して酒売りに見せた。

「北の国に寄ったときもらった黒米です。 これで、とっておきの”おむすび”なぞ、どうぞでしょう?。」

酒売りはまた笑う

「ふははは お前 なんでそれで酒交換しないんだよ 変な男だな」

客はハッと気づいて恥ずかしそうに笑った

「すみません えへへ」

「ふっ こっちだ。 ついてきな」

酒売りは、ガラガラと荷車を引きながらアゴで道を指した。

客は慌てて荷車を後ろから押す。

「そっぴやあんた名前は？ 毎年来るのに一回も聞いたことなかっ

たな」

カナカナと山の中をヒグラシが鳴き始めた。陽の光がだんだんと
橙色に変わっていく。

「みこと。 ミコトと言います。 酒売りさんは？」

「俺はアオ」

タプタプと波打つ音が聞こえる沢山の酒瓶と共に夕暮れの山道を都
でも集落でもない方向に二人は進んでいった。

酒小屋

濃い紺色に染まった東の空にはキラキラと星達が輝きだした。木々の中に囲まれたアオの住処は本当に小さな小屋だった。だがその隣に立っている酒を造る建物の方は大きいものだった。

「一晩、お世話になります。ミコトと申します。」

「あら 珍しいこんな山の中に。狭いですけど、どうぞ」

アオの奥さんは丁寧に挨拶をしてくれた。長い髪を後ろでたばねている。意外に若い。

こんな山の中で生活しているのでさぞ、簡素な生活だろうと思っていたミコトは、すこし驚いた。

着物もそう高級ではないが割と質のいいもので、都で売られているものだろう。小屋の中には生活に必要なものは何でも揃っていた。このアオという人物はどうやらずいぶん真面目に仕事をこなしているらしい。

小屋の中の囲炉裏で夕食ゆつけの仕度をしている真つ最中の様子だ。

「まっ ゆっくりしてくれ。」

アオはそう言うのと荷車に積み残されている酒瓶を隣接する建物の中にしまいだした。

ミコトは荷物を小屋の土間に置くと、あわてて手伝おうと外に出て荷車の上から瓶を持つとした。

ズシツとした重量感が腰まで響く。これはかなり重労働だ。

「よっ！」

それでも慣れない力を出し瓶を持ち上げよろよと運んだ。

「はっはっは 落とすなよ。 もし落としたら一年はただ働きだ」

小屋の中には大小様々な沢山の瓶が並んでいて天井からは干した花や草が数種つるされている。

「へー、アオさん。 すごいな。 研究家なんですね。」

ミコトが感嘆の声を上げていると、最後の瓶を持ったアオが棚に瓶を収めながらまた、口の右側だけをあげて笑った。

「俺がすごいんじゃないのさ………まっ いいだろ、そんな話は」

アオとミコトは酒屋小屋の戸を閉め、住処に入ろうとした時だった。

「あつ 父ちゃん……」

泥だらけになった子供が帰ってきた。 顔つきは奥さんに似ているが背が高い所はアオゆずりと言ったところか。

手には板のようなものを持っている。

なぜか 気まずそうにこちらを見て立ち尽くしている。

ミコトが挨拶をしようとすると、アオが先に息子に近づいた。

その足取りには凄みがあった。

バチン！！

いきなりアオが子供の頬を引つ叩いた。
今まで穏和だったアオの印象に似合わなかっただけにミコトはビシ
クリして言葉が出ない。

「ミツキ。 また約束をやぶったな。」

山の中の小屋の前で少しの間、沈黙が訪れた。

羽根突き

ミコトは囲炉裏を借り、持参の踏鞴鍋たたらなべで黒米を炊いていた。美味しそうなご飯の炊ける匂いが小屋の中を漂っている。

だがその幸せそうな匂いとは逆に気まずい空気が小屋の中を支配している。

「なんでだよ！！ 俺だけ 羽根突きやっちゃいけないんだよ」

「お前、親の言う事が聞けないのか！ いいか他に何の遊びもやっ たっていい。だがそれだけはダメだ」

アオと息子のミツキは部屋の奥でヒザを突き合わせて座っている。息子のミツキは納得いかない顔で父親を睨みつけていた。先ほどミツキが持っていたのは手製の羽子板だった。

旅の途中、ミコトも今各地で羽根突きが流行っていることは知っていた。

羽根突きとは、持ちやすく形を作った”羽子板”にでムクロジの実に鳥の羽を刺しこんだ”羽根”を打ち合うという遊戯で互いに打ち合い落としたら負け。

特に都の中ではもう何十年前から大会があり、それに優勝したものは特別に御門から沢山の褒美ももらえるという。毎年秋ごろにその大会があり、たくさんの観客で賑わうと聞いている。

「まあまあ、あんた子供の遊びだよ。そんな目くじら立てることは無いだろ」

見かねて慣れたように奥さんが囲炉裏の横においた鍋から夕食の汁を椀にもっている。

「遊びじゃない……」

ミツキはヒザの上に置いた拳を強く握った。

「俺、羽根突きで食べていきたいんだ！！ このあたりで俺より上手くつける奴なんて誰もいない」

まるで自分の人生をかけているかのような眼差しにアオはため息をついた。

「ダメだ。そんなモノで食っていけるほど世の中甘くはない。 考えなおせ」

そう言うとアオはおそらく一生懸命作った息子の羽子板を囲炉裏にくべた。

そして立ち上がると、小屋から出ていった。

息子のミツキは一層 拳を強く握りしめ泣き始めた。

「うづうづ……父ちゃんのはかああああ」

しくしくと泣く子供の声が小屋の中に流れる。

ミコトは、どうしていいかわからず無言でいた。

「すみませんね お客さんのいるときに……」

奥さんがミコトに気をつかってくれた。

「あの、もう一回吹いたら、火から下ろしてしばらくしたら、出来上がりなんで・・・私ちよつとモヨオしたみたいなんで、外に・・・」

ミコトは軽く笑みを作りながら小屋の外に出て戸を閉めた。

「はああああ」

その場で大きいため息をつく。

アオは隣の酒小屋から大きな瓢箪ひょうたんと杓ますを二つもって出てきた。

「悪いな・・・客の前で・・・」

杓ますでアオは暗がりの方を指した。

そこには巻き割用の切り株があり、たまにココで焚き火でもするのか、灰が固まっている場所だった。

「たまになココで一人でやるのさ。ま 適当に座ってくれ。

おうい！ なんか持ってきてくれ」

「はい」

アオの呼びかけに小屋の方から大きな声で奥さんから返事があった。

親父

「ぶはー・・・」

杓ますにナニナニ注がれた果実酒を美味そうに一気に飲み干したミコトは満足そうに息を吐いた。

それを焚き火を挟んで満足そうに見つめ微笑みを浮かべるアオ

「ふ 今までいろんな客にオレの酒を飲ませたけど、あんたほど美味そうに飲む奴は初めてだな。」

ミコトは照れてニコツ笑いかえす。

「飲み食いだけが楽しみでして・・・これは枇杷ヒナの酒ですね？」

「ほーわかるか？ はははは」

奥さんがミコトの持ってきた黒米をおむすびにしたものと、山菜の味噌焼きの乗った皿を持ってきて切り株の上に置いた。

ミコトの表情が見る見る明るく、瞳が輝く。山菜焼きの二つワラビを一本手に取る。

熱くて右手と左手でせわしく持ち替えながら口に運ぶ。

頬が赤く染まりこれ以上ないほど目じりが垂れ、首をもたげた。

思い出したように杓ますに酒をついで一口。飲み干すとミコトは、ほわーっと口をだらしなく開けたまま

余韻に浸っている。

「ふふふ ホント 面白い人だね この人」

奥さんもミコトの食べっぷり 呑みっぷりに笑みがこぼれた。

「ミツキは？」

奥さんに酒の入った枡ますを手渡し、アオは優しく聞いた。

「泣きつかれて寝たわよ」

一口、酒をのむと奥さんはすぐにアオに枡を返した。

「私は先に寝かせてもらうよ。今日はアンタの代わりに薪割ったから疲れたよ。」

「ああ。わるいな」

「じゃ ミコトさん」ゆっくり

そう言つと奥さんは小屋のほうに帰っていった。

ミコトはおむすびを、ほおばりながら奥さんの後ろ姿を見送った。すっかりほろ酔いだ。

「なんで ダメなんですか？」

アオはおむすびを皿の上から持ったところだった。

ミコトはもう三杯目の酒を枡についだ。

「羽根突きなんて、別にいいじゃないですか。どこの子もやってますよ」

アオはとつたおむすびを一口食べ酒を含み、枘を地面に置くとそのまま寝転がった。

木々の間から、立ち上る焚き火の煙が昇っていく。その奥には夜空に星が瞬いている。

「あんだ、親は？」

ミコトは不意に聞かれ首を横にふった。語るべき親の記憶はほとんどない。

アオは視線を夜空に向けたまま話をしだした。

「俺の親父が羽根突きだったからだよ。」

ミコトは飲もうとした酒を口の手前で止めた。

「親父がいつこの都に来たのかは知らないが、やはりその当時から羽根突きは人気があつてな、体がでかくて力も強かったから、あつというまに都一番の羽根突きものと、はやされたらしい。何年も連続で誰も親父には勝てなかつたって話だ。

俺の母と出会い一緒になつたのもその頃だつたらしい。

だが酒好きで、女好きな親父はその大会で御門みかどからもらつた褒美を全部、その年の内に使い果たすのさ。

遊ぶことで精一杯の親父は働くこともせず、普通の生活は母親が苦勞して俺をたばさせてくれたんだ。

俺が八つの頃だったか、御門が崩御ほうぎょしまだ子供の御門に変わったんだ。そしたら、しばらく羽根突き大会が中止になつたんだ。

それで親父は困つたのさ。

なにせ自分には羽根突きしかない。おまけにその傲慢な態度に都の連中は辟易へきえきとしていた。

今更、普通の仕事が出来たと言って誰もがお断りだったのさ。切羽詰った親父は、そのでかい体で脅しや詐欺、人様のものまで盗むようになった。

しょっちゅう、役人に捕まってついには罰として利き手の親指を切られ歯も何本も抜かれ、足もまともに動けんようになって戻ってきた。もう別人だよ。

親父のおかげでどれだけ俺や母が肩身のせまい生活を強いられたと思う。

親父だけでなく俺も歩いているだけで石を投げつけられる始末さ。なまじ大会で顔が売れているぶん、俺らはもう都に居続けることができんようになったのさ。

そんな男見捨てても罰はあたらんと思うんだが、

母は親父を見捨てず一緒にこの住処で生きていたがな、一年ほどで毒蛇に噛まれてすぐに死んだ。

幼いガキの俺はそんな・・・この世で一番忌み嫌う親父と一緒に暮らすしかなかったんだ。

なんか気にいらん事があるとぶん殴られ、どうやって連れ込んだのか。

どっかのあばずれを連れてきたりして・・・

こんな親父には絶対になるまい。

そう思っ生きてきたのさ。

だから俺は羽根突きなんぞ 見るのも嫌でな。

いくら遊びだとしても、俺の息子には羽根突きなんぞさせたくないんだ。」

アオは上体を起こすと地面に置いた枡を持ち上げグビッと飲んだ。

「まあ 親父は酒を作ることだけは得意でな。俺に自分の飲む酒を

作らせるために色々教えた。

今の俺の稼業が成り立つのはあのころの親父の製法があつてのことだからな。」

アオはまるで胸につかえていたものを吐き出すように、その長い話を語りきった。

だが、ミコトはだいぶ酔いがまわつたのか、うつらうつらとして眠そうにしている。

それでもアオは、まだ語りつづけた。

「あんなボロボロの体になつても、

俺に話すことは若いころの自慢話ばかりでな、中でもあんな一番笑つたのは

”俺は陰陽師”おんみょうじだとかいう話だつたよ。

人様のため、神様のために地脈調査だ、祈祷だのする偉い方だろ？
陰陽師なんてのは・・・

あんだだけ好き勝手生きている親父がそんなわけないって思つてたけどな・・・それでも実の父だからな

心のどこかで信じてみたりしたこともあつたさ。

まっ 絶対に嘘なんだけどな、要するに生まれついでの見栄っ張りだつたんだろうなあの人・・・」

語り終え、焚き火がだいぶ小さくなつたことに気づいたアオが薪をくべようと火をみると

その奥ではすっかり寝てしまったミコトが目にはいつた。

また口の右側だけをあげて笑うとアオは焚き火に土をかぶせ、ミコトを肩で担ぎ

小屋に運んでいく。

焚き火はまだ土の中でパチっ
と音をたてていた。

畑

蟻が顔の上を歩いた。

ミコトはそのかゆみで目を覚ました。

小屋の中にはアオや家族はもういない。

アクビをしながら外に出ると、奥さんが籠かごを担いでいる。

「ああ あんた起きたの？ ずいぶん飲んだみたいだね。」

固定する紐をゆわきながら、くすつと笑う。

「あの、アオさんは・・・」

「ウチの人なら畑さ、酒に漬ける花を育ててるもんも結構あるからね。アタシはこれからキノコ拾い。

アンタもう発つのかい？」

ミコトは顔をポリポリとかきながらあたりを見回した。

「そうですね。長居しても何ですし。アオさんの畑はどちらですか？ 挨拶していききたい。」

「律儀れいぎだね。ここ真っ直ぐいってアケビが巻いている木を左にちよつと行ったところだよ。開けてるからすぐわかる」

「ありがとうございます」

ミコトはそついうと一礼して奥さんを見送った。

そして大きなアクビを一つした。

畑はすぐにわかった。

ちよつとした広さの場所を想像していたミコトだったが、そこは一面の花畑だった。

一番むこうの畑の端までは歩いてちよつとかかりそうだ。咲いているのはいかりそうの薄紫の花だ

「おー あんた もう発つんか」

畑の真ん中で雑草とりをしているアオがミコトに気づき声をかけ近づいてきた。

「すごい広さですねー」

「ああ、ここは特にな。昨日話したろ？ 俺の親父の話。」

「え？ ええ」

ミコトは半分酔っ払って眠っていたので、ほとんど話を覚えてなかった。

「あのくそ親父がな、このいかりそうの草だけは特に沢山育てろってうるさくてな。なんせ煎じるとこれ有名な夜の薬になるからな。

増えすぎちまって困ってるよ。酒に使うんだってこんなには使わんしな。」

「あの昨日は本当におかげで久々によく眠れました。また寄りま

すので。」

「ああ、だがあんたもブラブラしとらんで何処かに根を張っていか
にやいかんよ。せめて酒くらい金で買ってくれ」

アオはミコトの背中をポンと叩いた。

ミコトはニコツと笑うと会釈をして、出発した。
と思ったら足元の小石につまづいて転ぶ。
照れくさそうに笑い。アオも笑った。

「達者でな」

アオはミコトの姿が小さくなるまで見送った。

黄色い雲

それから、いくらかの時が経った。

アオの息子、ミツキは結局、羽根突き大会に勝手に出た。

しかし大人に負け、しょぼしょぼと帰ってくると、アオにまた叱られた。

本格的な秋になると種子の収穫に追われ、アオも奥さんもミツキもそれを酒に漬ける作業に追われた。

やがて冬が訪れ一面に雪景色が広がった。

この時期のアオはあまり商売には出ず、酒小屋で沢山の仕込んだ瓶の中をかき回しつづける。

秋の間に貯め込んだ食料を細々と食べ、冬をやり過ごした。

雪も少なくなり、道もだいぶ通りやすくなってきたころ、ミツキも遊びに出るようになった。

旅館通りにはミツキと同じころの子供も多く、真冬の間も本当は遊びに行きたくてウズウズしていたのだ。

アオもそろそろ、食料も尽きてきたころというところで、背負える程度の酒と金をもって集落か都に行くことにした。

よく晴れた寒い日だった。

通いなれた道を進む。山道だというのに今日も風が強い。

それに風の中に妙な匂いを感じた。

集落につくと、干し肉を買った旅館のものも同じことを言った。

「最近、風が匂う。何の匂いじゃるか・・・」

それでも晴れて歩きやすかったこともあり、都まで足を伸ばした。

都と集落の間には平野になる場所があり、そこ一面には地元の農家

が田を植えていた。

チラホラ雪が残っている所もある。

さすがに平野になると風が強かった。アオは体の芯まで凍えた。あと二里も歩けばまた、木々の茂る山道になるため

いつもこの時期のこの場所は我慢のしどころだった。

そして、ちらつと田んぼの向こうに広がる遠方の山々を見た。

「！」

アオは足を止めた。

遠方の山々の空から、見たこともない黄色い雲がアオの居る方角に向かって広がり始めた。

こんな雲は生まれて初めて見る。

アオは嫌な予感がして、引き換えした。

足早に。

途中もう一度旅館などに寄り黄色い雲のことを話すと、他にも見たという者がたくさんいた。

中でも年寄りの旅人がゲホゲホと咳せきをしながら言った。

「あの黄色い雲は不吉の象徴じゃ。わしが若いころもあの雲が出たあと、原因不明の病が流行った。

長い咳が何日も続いたあと、死んだものも何人も出た。

もうすぐ、ここいら辺にも強い風と共に来るはずじゃ、あまり家から出ないほうがええ。」

アオは急いで山道を家に向かった。

途中木々の間からちらつと見える遠方の山々の上の空はどんどん黄色い雲が大きく支配している。

家に着くと、奥さんが薪を割っていた。

「あら あんた早いね。 どうしたの？」

「家に入れ！ 今すぐだ！ ミツキはどうした？」

「だって朝、遊びに行ったきりだよ どうしたんだよアンタ」

アオの様子に異変を感じ取った奥さんは不安そうに聞いた。
その時だった。

ビヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
.....

物凄く強い風がアオたちを襲った。

アオは妻を連れてすぐに家に入り戸を閉めた。
空気の入りそうなところは全部閉めた。

カタカタカタ.....ドドドドド.....

何かか吹き飛ばされたり当たったりする音がする。

「あんた、なんなのこの風」

「俺にもよくわからん。 それよりミツキはどこに遊び行った」

「さあ、マツン所だと思うけど、どこで遊んでいるかまでは.....
」

強い風はどれほど続いただろうか.....
収まったところ、恐る恐る外にでると小屋の前の薪が少し風で荒れて

いて後は道具がいくつかどこかに飛んでしまっていた。空を見上げると、やはり薄黄色い空が広がり不吉さを漂わせていた。だが風はもう穏やかなものに変わっていった。奥さんが薪を拾うと風のせいなのか妙に埃っぽかった。

夕暮れになってミツキは帰ってきた。

すごい風だったと興奮していた。友達と外に居たが、風に沿って走るとうんと早く走れて楽しかったらしい。

おかげで体中埃だらけだ。パンパンと叩くと煙が立ちそうだった。

そんな埃さえも子供のミツキには楽しそうで、アオはなんだか安心した。

取り越し苦労だったのかもしれない。

囲炉裏に火をくべると酒小屋から、酒を持ってきた。

干し肉でいっぱいやり始め、奥さんはキノコを干したものを水で戻し味噌で汁を作った。

アオの小屋にはいつもの団欒だんらんがはじまった。

咳

その三日後位だったろうか。

酒を売りに都まで来ていたアオが人々の異変に気づいたのは。

みな咳をしきりにしていた。

あの黄色い雲が通り過ぎてからというもの、次々に体に偏重をきたした者達が増えたという。

アオはいつもどおり酒を売るが、みなあまり食欲もなく酒どころではないらしい。

仕方なく家路に着こうとしたとき、重病の老人が苦しそうに倒れた。しきりに咳が止らず嘔吐までしている。

うつつたら大変だ。

アオは着物の裾で口を覆い、その場を去った。

病人達は都だけにとどまらず、旅館の集落の者達も沢山の人々が咳をだし熱を出すものまで

出ていた。

足早に住処につくと、やはり咳の音が聞こえた。

アオはあわてて小屋の中に入ると息子のミツキが咳がとまらず苦しんで寝たきりになっていた。

「あんた・・・おかえり。ミツキったら朝まではなんともなかつ

ただけど、段々咳をし始めて、熱は無いようんだけど

どうしたんだろう・・・とりあえず精のつくものもこしらえようと思つてたところなんだよ。お医者に見せたらどうだろう」

アオは荷物を土間に置き、あわててミツキのそばによる。

「ゴホ　ゴホ　おかえり　とおちゃ・・・ゴホ」

アオはミツキの額を優しくさわる。 やはり熱はまだない。

「都も集落もみな、この病で苦しんでいるものばかりだ、医者に見せてもだめなのかもしれん」

「そんな・・・!!」

奥さんは心配そうに包丁の手を止めた。

アオはしばし囲炉裏の前で考えこんだ。

そして、何か思いついたように立ち上がり、物置の箱の中をあれやこれやと物色しはじめた。

そして小さな竹筒を取り出した。

「すこし、出てくる。 いいか精のつくもんもいいが、とにかく食べやすいものを作ってやれ。俺はもしかしたら、すこし帰ってこないかもしれん。

それまでミツキをしつかり見てるんだぞ」

「え あんたちよっと・・・」

アオはそう言つと小屋を飛び出し酒小屋にある荷物と金を掴み飛び出した。

目が良くなる毒

アオは都を過ぎさらに南下した。

八剣山。

アオの知っているかぎり一番高い山だった。

そこまで、歩きづめでも二日近くかかる。

荷物の中に入ってる竹筒には夏に酒と交換した”目がよく見える毒”が入っている。

ここいらで一番高い山に行けば、どこでも見渡せるはず。

アオはミコトを探そうとしていた。

この謎の病に、もしかしたらミコトなら直す薬、いや毒を持っているかもしれない。

そんな直感がアオの頭の中を走っていたのだ。

だが、八剣山はそんなに甘い山ではなかった。

行者たちが修行に使う山で女人立ち入り禁止になっているほどの険しい山だった。

終わり際とはいえ冬だ。風も冷たい。

旅館の老人は「何人も死んだ」と言っていた。

手は豆がつぶれて血だらけになっている。

それでもアオは登りつづけた。すこしでも高い所にいかなければ・
・

だが山というより崖になってくる。これ以上は素人には無理だった。気づけばあと一歩でも動けば落ちそうな所にまできていた。

足元の崩れた石がカラカラと落ちていく。

どこまで落ちたかわからない。

それでもまだ上を目指した。

このままでは山が邪魔で向こう半分が見えない。
だがもう賭けるしかない。
アオは毒を飲んだ。

強い風がアオの体を揺らす。

腹のそこが熱くなってきた。その熱さがだんだん上にながってくる。
ノドをとおり口の奥から鼻の奥にそして目の奥に達した。

アオは怖くなり目を閉じた。

だが、閉じたはずなのに視界が閉じられない。
まぶた 瞼など透かして見えるのだ。

崖の下を見ると肉眼では見えないはずのない地面の苔こけまで見える。

アオは一気に遠くを見渡した。

冬の晴天で雲はほとんどなく見渡せた。ものすごい情報量がアオの
視界から入ってきた。

不思議なことに一つの街に何百人といるであろう人の顔や姿まで一
瞬で認識できた。

ミコトは見当たらない。

ゆっくりと見渡した。 はるか遠くには日本一と言われるフジの山
まで見えた。

南の国の集落も見渡したがいないようだ。

アオはあきらめず目を凝らした。

時が経つにつれ、目の機能は上がっていく。それと同時に目の玉が
血管を浮き立たせ段々出てきた。

痛い。

どれほど見続けたらう。

段々と太陽が西に傾いている。

アオはここまで一睡もせずをやってきた。体は疲弊しきっている。

これ以上ここにいれば疲れ果て、落ちてしまうかもしれない。

もしかしたら山の向こう半分の方にいるのかもしれない。

あきらめ一回下山しようとしたとき。
アオはふと川を見た。
はるか西の方角の大きな川だ。
そこで魚釣りをしている男が見えた。

「いた!！」

ミコトだ。大きなアクビをしながら釣竿だけをたらし大きな岩の
うえで寝ている。

ここからあの山までどれほどかかるか。また二日はかかってしまう。
アオはその立っているのも精一杯の場所で荷物から火打ち石と布に
巻かれた松明をだし。

強風の中くろうして火をつけた。

松明はちいさな煙をあげもつもと燃え出す。

「たのむ! 気づいてくれ!！」

アオは大きく松明をまわした。
ほんとうなら見えるはずなどない。
それでも松明を、回し続けた。

「このままじゃ、ミツキも都の連中も死んじゃうかもしれないんだ、
たのむ! たのむ!！」

アオは大きな声でミコトに話しかけた。
そのときだった。寝ていたはずのミコトがぱっと上体をおこした。
誰かと話している。どうみても近くには誰もいない。
近くには雑草くらいしかない。

そして、ふと自分の方を見た。そして首をかしげもう一度誰かと話
している。

ミコトは荷物の中からアオに上げたものと同じような竹筒を取り出しその中から何か飲んだ。

おそらくアオと同じ毒だ。

ミコトはアオに気づいた。

そして笑顔で手を振った。

アオは手でこっちつくるよう合図した。

ミコトは最初よく理解できないようだったが、自分を指差しアオを指差し頭のうえで大きく円を作った。

すると、すぐに釣竿をかたづけ始めた。

アオは安堵した。

通じたのだ。でもいったいなぜ？

不思議なことがおおすぎてアオも理解がつかないが、とりあえずその危険な場所から降りることにした。

陰陽師（終）

アオが住処である小屋に着いたのは二日後だった。

かわらずミツキはゼーゼーと苦しそうにしている、出発時より明らかに衰弱している。

アオもヘトヘトの体であったが、息子への心配のが先であった。

奥さんも寝ずに看病していたらしく疲労が見てとれた

アオ着いたその夜にミコトが小屋に姿を見せた。

「やーどうもどうも　なんかエライところから呼んでいただいたみたいで……」

「でも、どうしたんですか？　私まだあの酒を買えるような金は手にいれてないですけど……」

ゆっくりと荷物をおろすミコトだが、奥で苦しんでいるミツキを見ておどろいた。

アオはミコトの手を握った。

「頼む。この子を助けてやってくれ。　あんたも旅の途中で気づいただろ。　あの黄色い雲が通り過ぎてからというもの

都やこのあたりの人間はほとんどこんな調子なんだ！　医者も役にはたたない様子。　もうあんたの不思議な毒に任せるしか思いつかなかったのだ。」

必死の頼みにミコトは焦りの表情を見せる。

「えー　む・無理ですよ。私医者でもなんでもないので……　買
い被りすぎですよ」

「頼む！！ この子が治れば酒でもなんでも好きなだけやる。頼む！！」

「え？ 酒？ 好きなだけですか？」

ミコトはアオの言葉にすこしやる気が出てきたのか、荷物の中の”毒袋”を漁った。

沢山の竹筒や竹の皮で包まれた毒が出てくる。

しかし、どれもこれも不思議な効能のものばかりで役にはたたない。

「うーん・・・」

ミツキのまえで正座し腕組みをしたまま首をかしげた。

「黄色い雲ってというのはこの間の突風の日のことですよね？」

「ああ やはりそれと何か関係しているのか？」

ミコトはアゴのところに手をやって必死に考えた。

「あれはね この国のはるか西側、海を越えた大陸のもっと先におつきなおつきな砂漠があるんです。それが毎年この時期になると起こる大きな風によって沢山の砂を巻き込んでこの国までやってくる。言わば砂嵐のようなものなんです。普通はここまで届くことはほとんどないんですが・・・今年のは大きかったようで・・・」

「大陸ってあんた、海まで渡ったことがあるのか？」

「えーたまに・・・」

その時、ミコトの目には部屋の中に転がっている瓢箪ひょうたんが映った。

「いかりさけ……」

ミコトは小さく呟くと、すこし笑い始めた……

「ふふ……まさか……」

アオはミコトの笑みに少し怒りぎみでミコトに近づいた。

もしかしたら、この男を頼ろうなんてとんでもない勘違いかもしれない……そう思った。

ミコトは立ち上がり着物の裾を荷物の中から出した紐でしばり両腕が使いやすいようにした。

「いかりせう 錨草の畑。ありましたよね？ あれどうなりました？」

「いかり……ああ。あれなら使うぶんだけとって、放置してあるが……」

ミコトはアオと奥さんを横切り、草履を履いた。

土間に置いてあった籠を持ち外に飛び出した。

アオも訳もわからずミコトの後を追った。

そして錨草の畑までやってきた。

「おそらく、あの黄色い突風に含まれる砂は空気中に漂っていられる位ですから相当に小さくなっている。

それを大量に吸い込んだ人間の胸に入ると中でその微細な砂が体内を傷つけて起こる病ではないでしょうか。

実は大陸である砂がある砂漠の民にそういう病になると聞いたことがあるのです。そして直す薬草のことも聞いた事が……」

もはや花は枯れ草だけになっている。

ミコトは一枚、一枚錨草の葉を摘んでいく。

「淫羊いんようかく？。錨草のことです。この草は血流を良くしアツチの方が元気になるのですが、その効能がこのような息をする管の病氣にも効くらしいのです。」

アオはその話を聞くとすぐにミコトを手伝った。

あつという間に、葉を籠いっぱいにあつめ、飛んで帰り煎じてミツキに飲ました。

夜に一度、早朝に一度、昏前に一度、念入りに飲ませた。

そして、ミツキは段々と楽に息をするようになり始める。

奥さんは安堵でしくしくと泣き始めた。

その間もアオとミコトは畑に出てできるかぎりの葉を集めていた。少しでも集め都や旅館の集落に配るためだ。

「ありがとう ミコト・・・ミツキもなんとか持ち直したみたいだし・・・本当にあんたのおかげだ」

アオは葉を摘みながらミコトに礼を言った。

ミコトは照れながら頭をかいた。

「でも、偶然なんですかね・・・」

アオは一度立ち上がり、腰を伸ばしながらミコトの言葉を聞き返した。

「なにが？」

「知ってました？ 羽根突きっていうのも、元々陰陽道の一つなんですよ？」

「？」

「古来、蚊による熱病が流行ったことがあって、そのとき偉い陰陽師の方が考え出したのは蚊をたべる蜻蛉とんぼを見立てた羽根を作りそれを陰陽師同士が板で飛ばしあい、蚊を追い払おうとしたのが始まりなんですって。」

「へー。それが……？」

「だってこの錨草にしても、私は好きですが一人が一年に飲むにしたらって普通はいくら何でもこんなに要らないでしょう。」

ミコトも立ち上がり腰を伸ばしなら、あらためてその広い畑を見回した。

アオはまたしゃがみ葉を摘みはじめる。

「もしあの黄色い雲を予見してこの畑をあなたに作らせていたとしたら……」

ミコトはアオの方を見た。

「もしかして、アオさんのお父さん本当におんみよ……」
「やめてくれ！」

アオはミコトの言葉をさえぎった。

「……む……無駄話は止めてくれ。この葉を必要な奴がた
くさんいるんだから。」

「……はあ……」

そういわれミコトは再び作業に戻った。

そして2人で摘んだ錨草の葉で何人もの民が救われた。

ミコトは、好きな酒を瓶ごともらうことにした。
しかし、持ちきれないので無くなったら再び訪れると約束して去っ
た。

その年の秋。

アオの息子ミツキは羽根突き大会に出た。

やはり大人に負け、悔しそうに泣いたらしい。

どうやら祖父ほどの羽根突きの才能はないようだ……

その観客席に、アオと奥さんの姿があったという。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0382j/>

命（ミコト） 錨酒

2010年10月10日12時58分発行